

芸術科『書道Ⅰ』学習指導案

大阪府立〇〇高等学校 〇〇 〇〇

1 日 時 平成 26 年〇月〇日 (〇) 第 3・4 限

2 場 所 府立〇〇高等学校 書道教室

3 対 象 学 年 第 1 学年〇・〇組 24 名

4 単 元 名 「仕上げだけは簡単！彫らずに書くだけ 発泡スチロール印づくり」 (14 時間)

5 教 科 書 「書Ⅰ」 (教育図書)

6 単 元 目 標

- (1) 自分の名前を使い書体に興味、関心と愛着を持たせ、印の表現や鑑賞の創造的活動に意欲的主体的に取り組む。
(書への関心・意欲・態度)
- (2) 空間の開け方を理解し、文字の結構の取り方に敏感になり、自らの意図に基づいて構想し、表現を工夫する。
(書表現の構想と工夫)
- (3) 筆の弾力を使った用筆法を身につけ様々な書体に応用でき、鉛筆を使って印刀で彫ったような風格を出すなど自己を主体的に表現する能力を伸ばす。
(創造的な書表現の技能)
- (4) 様々な篆刻作品を鑑賞してそれぞれの表現の違いを理解し、白と黒の作品に赤色の印が入ることによる効果を味わうなど印の効用を理解し、篆刻のよさや美しさを創造的に味わう。
(鑑賞の能力)

7 教 材 観

1 学期に通りの書体について基本的な学習をしたうえで、展覧会に出品するためのパネル張りの小作品を制作した。その作品に押印することによって、より作品を引き締めたものとして完成させたい。本来なら石材への篆刻を指導したいのであるが、彫ることに至る印稿作りに重きをおくことにより、空間処理に対する感性を敏感にし、文字表現の緻密さを身につけさせたい。また石印材を彫る時間を省き押印の効果を味わわせることができると考える。

8 生 徒 観

「略」

9 指 導 観

さまざまな書体を名前を通して学習することにより、自分の名前への愛着を持ち、かつさまざまな書体の用筆や結構の取り方の共通点や相違点などを理解させたい。また小筆や鉛筆を用いて緻密な作業をすることにより筆先の微妙な弾力を指先に感じさせ、平素の書写を行う際にも筆先やペン先に神経を行き届かせるように指導する。その上で石を彫刻するのではなく発泡スチロールに書くという簡単な作業で短時間に印ができあがり、作品に対する押印の効果を感じ取らせ、自分自身の作品を大切にすることを養う。またさまざまな印影を鑑賞することにより篆刻の奥深さを味わわせ各自の印にも応用させる。

10 単元の評価規準

	書への関心・意欲・態度	書表現の構想と工夫	創造的な書表現の技能	鑑賞の能力
単元 の 評 価 規 準	〔表現〕 - 文字の成り立ちに関心を持つ。 - 各書体に共通する筆の弾力を使うことを理解したうえで書体による表現の違いを発見し、それぞれの場面において主体的・意欲的に活動している。 - 篆書の分間布白や楷書を中心とした間架結構を理解し、書表現における余白の重要性を知る。 〔鑑賞〕 - 教材プリントに示された多様な印影の表現方法の違いを積極的に探ろうとする。	名前に起因する文字の違いによる表現意図を明確にしてその表現意図に応じた表現方法を工夫する。	様々な場面において自分の作品の表現意図を明らかにする技術を身に付けている。	- プリントに示した多様な印の表現の違いを理解する。 - 石材印や金属印に見られるサビの効果を理解し発泡スチロール印に応用し、作品に押印したときの赤の効果を感じ取る。また他の生徒の作品についての理解を深める。
学 習 活 動 に 即 した 評 価 規 準	〔表現・関①〕 - 篆書に関心を持ち部首等が何を表わすのか考えて、その文字の本来の意味を理解しようとする。 - 文字調べにおいて字書の調べ方をよく理解し、筆の弾力を生かした運筆で丁寧に書き写している。 - 印稿制作においてプリントをよく読み、手順通りに作業を進めている。 〔鑑賞・関心②〕 - プリントの鑑賞学習において積極的に発言する。 - プリント鑑賞において多様な表現の違いを発見する - 相互鑑賞において、それぞれの表現の工夫点や良さを積極的に味わおうとしている	〔構成①〕 - 赤と白のバランス、分間布白、間架結構について理解し表現している。 - 界線や撃辺の効果を理解し、印稿に応用している。	〔技能①〕 - 逆筆を利用した筆の弾力を最大限に生かした運筆が出来ている。 - 運筆の方法により筆画に表情が出ることを理解し、応用する。 - プリントを参考にしながら、様々な印稿のパターンを考える。 - 界線や撃辺の効果を理解した上で、鉛筆の太さや運筆の角度などを考えて調整し、表現に役立てている。	〔鑑賞①〕 - さまざまな風格の印の違いについて感じ取り、自分の言葉で説明する。 〔鑑賞②〕 - パネル作品に押印した自分や他の生徒の印とその作品について押印の効果を理解し、それらの工夫点や良さを味わい、自分の感じたことを述べている。

11 指導と評価の計画（全 14 時間）

時間	学習のねらい	学習活動	学習活動に即した評価規準				評価方法、留意点等
			関	構	技	鑑	
1 ・ 2	- 自分の名前に関心を持つ。 - 書体による表現の違いを理解する。 - 小筆の用筆法を身につける。 - 参考印を見ながら表現の違いを知る。	- プリントを配布し、今後の流れを理解する。 - 五体字類を用いて各自の名前（フルネーム）を調べて書体ごとに書き写す。			技①	鑑①	- 小筆の用筆法に注意して表現している。（観察） - 書体の違いを理解している。 （作品）（プリント） 評価の場面Ⅰ
3 ・ 4	大筆を使って篆書の用筆法を身に付ける。	逆筆での筆の弾力をためる方法を基本点画を使って身に付け、泰山刻石の「皇帝」を臨書する。	関①		技①		起筆から収筆まで筆の弾力を生かし左右相称に書けている。 （観察）（作品） 評価の場面Ⅱ
5 ・ 6	大筆を使って篆書の分間布白を理解し、空間を均等分にする方法を身に付ける。	- 鄧完白の篆書作品から、文字の成り立ちを理解し、篆書に対する興味を持つ。 - 画数の少ない文字、次に横画の多い文字を使い、筆順通りではなく横画を先に、縦画を後に書き、分間を決めていく方法を学び、分間布白について理解する。	関①		技①		分間布白を理解したうえで筆の弾力を使い、張りのある筆画で篆書を表現している。 （観察）（作品） 評価の場面Ⅲ
7 ・ 8	小筆を使って名前を篆書で書き、印稿を工夫する。	『朝陽字鑑精萃』を使用して自分の名前の篆書を調べ書き写す。 - 字書にない文字については字源の説明を聞き、何故掲載されていないのを理解し、範書を使う。 - プリントを参考にして様々な印稿を考える。		構①	技①		- 小筆の用筆法に注意して表現している。（観察） - 篆書の筆遣いを理解したうえで横平堅直の筆画を表現し、分間が決まっている。 - 正方形の中へどう収めるか、界線と文字との関連性を考え、多様なパターンを工夫している。 （作品）（プリント） 評価の場面Ⅳ

9 ・ 10	これまでのアイデアを生かしつつ、よりレベルの高い印稿づくりをめざす。	示範された作品を参考に、小筆で練習する。		構①	技①		- 筆の弾力を利用して分間を決め、正方形の中へうまく収めている。 - 界線やサビの効果を理解しながら練習している。 (作品) (プリント)
11 ・ 12	- 鉛筆を使った印稿の表現を工夫する。 - 逆字印稿を表現する方法を身に付け表す。	- 筆で書いた時の味わいが鉛筆で再現できるように工夫する。 - 半紙の裏側から見た逆字を身に付け表す。		構①	技①		- 筆で書いたような味わいある筆画を鉛筆で表現している。 - 界線、サビも含め逆字を丁寧に書いている。 (作品) (プリント)
13 ・ 14 (本時)	- 逆字印稿の表現を身に付け表す - 発泡スチロール印に意図に基づいて表現する。 - パネル作品に押印し、相互鑑賞により印の効用について理解しそのよさを味わう。	- 逆字印稿を再度練習することで、発泡スチロールに一度で表現できる。 - 表現の深化をめざし何度か発泡スチロールに彫りなおす。 - 完成した印を慎重にパネル作品に押印し、相互鑑賞を行う。	関①		技①	鑑②	- 時間を費やした印稿づくりの総決算として印を完成することに意欲的に取り組んでいる。 - 分間布白を十分に理解し、余白と筆画のバランスをうまくとっている。 - 自作や他の生徒の作品の良さを感じ取りながら押印の効用について理解している。 (作品) (プリント)

12 観点別評価の進め方 評価の場面Ⅶ について

学習活動に即した評価規準	評価基準	具体的な事項 (評価の総括につながる事項)
【創造的な書表現の技能】 ・界線や撃辺の効果を理解した上で、鉛筆の太さや運筆の角度などを考えて調整し、表現に役立てている。	A 分間布白を十分に理解し、余白と筆画のバランスをうまくとっている。 B 分間布白は理解しているがそれを表現する技能が不足している。 C 分間布白について十分理解ができておらず、表現技能も伴わない。	・印稿作成において文字のバランスをうまく正方形に収められるか。 ・印稿作成時において界線やサビの効果を考えながら丁寧な印稿づくりができているか。

13 本時の学習 (13・14 時)

○本時の目標

- ・ 味わい深い印を作らせ、パネル作品に押印することにより、作品が完成する喜びを味わわせる。

○本時の評価規準

- 関心① 時間を費やした印稿づくりの総決算として印を完成することに意欲的に取り組んでいる。

- 技能① 分間布白を十分に理解し、余白と筆画のバランスをうまくとっている。

- 界線サビの効果を理解したうえで鉛筆で切れ味ある運筆をし、丁寧に押印している。

- 鑑賞① 自作や他の生徒の作品の良さを感じ取りながら押印の効用について理解している。

○本時で扱う教材

- 教科書「書I」(教育図書)制作プリント

○学習指導の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価規準と評価方法
導入 (十分)	- 作業準備 - 前時までの振り返りをする。 - 学習内容を知る。 - 学習目標を知る。 (10分)	- 出欠確認 - 前時までの学習内容を、プリントで確認する。 - 本時の学習内容を知る。	(観察)
展開 (八十分)	- 前次の復習 (逆字での印稿練習) (15分) - 発泡スチロールに太めの鉛筆で刻印し、削った鉛筆でサビを入れる。 (25分) 【休憩 10分】 - 刻印が終わり次第、プリントに押印する。 (10分) - 印影を確認して補刀する。 (15分) - 再押印したものを最終確認してパネル作品に押印し、相互鑑賞する。 (15分)	- きちんと逆字を練習しているかを確認する。 - のりパネ（発泡スチロールの糊付きパネル）を3枚配付し、3回書けることと、貼り合わせ方を指示する。 - 鉛筆の発泡スチロールへの力加減を正確に伝える。 - 印泥の扱い方を徹底的に理解させる。 - パネル作品の押印部分の確認、および爪による印面処理を指示する。 - 押印後の拭き取りを指示する。 - 満足のいく印が出来ていない場合はパネル作品には押印せず、彫り直しを指示する。 - 些細なことでも良いので、作品の良い部分を探させ互いに褒め合わせる。 - 悪いところは言わない。	【書への関心・意欲・態度】 - 集中して説明を聞き、手順を間違わずによりよい作品作りに意欲的に取り組んでいる。 (観察) 【創造的な書表現の技能】 - 練習したとおりに分間を決めて表現している。 (作品) - 鉛筆の太さを工夫しながらサビの付け方を工夫し、表現している。 (作品) 【鑑賞の能力】 - 相互観察をしながら相手の作品の良いところを見つけて評価できる。 (観察)
まとめ (十分)	- プリントとパネル作品を提出する。 - 自己評価、感想の記入をする。 - 後片付け - 次時の予告を聞く。	- 作品を提出させる。 - 後片付けをきちんとさせる。 - 次回予告をする。	(制作プリント) (作品) (観察)

14 具体的な指導の改善内容

評価基準（13・14 限目 評価規準 技①に基づく）

A 【十分満足できる状況】⇒分間布白を十分に理解し、余白と筆画のバランスをうまくとっている。

⇒次の時間でどのように対応（指導）するか？

…ビジュアルプレゼンターで作品を見せながら、褒め称え何故良い評価をもらったのか説明する。

B 【おおむね満足できる状況】⇒分間布白は理解しているがそれを表現する技能が不足している。

⇒次の時間でどのように対応（指導）するか？

…ビジュアルプレゼンターで作品を見せながら、褒め称えながらも注意すべきことを指示し、今後の作品制作に生かさせる。

C 【努力を要する状況】⇒分間布白について十分理解ができておらず、表現技能もも伴わない。

⇒次の時間でどのように対応（指導）するか？

…個別に指導し、もう一度彫りなおさせてパネル作品に押印できるようにする。